

『ドイツ・イデオロギー』 自筆草稿 —何が問題か？

～大村 泉氏への回答～

黒 滝 正 昭

キーワード：マルクス/エンゲルス 『ドイツ・イデオロギー』第1章自筆草稿
「持ち分問題」 MEGA² I/5 リャザーノフ, D.

本誌前号（No.30, 2021年3月）に大村 泉氏は、論文「黒滝正昭による『ドイツ・イデオロギー』草稿のマルクス口述・エンゲルス筆記説批判への反論」を発表した。これは本誌前々号（No.29, 2020年3月）に掲載された拙稿「『ドイツ・イデオロギー』は「マルクス口述・エンゲルス筆記」の産物か？—大村 泉説の吟味—」に対する氏の批判論文である。本稿は、この批判論文への回答である。

I 拙稿（2020年3月）発表に至る経過

これは通常であれば触れる必要のない事柄であるが、大村氏がやや不正確に（肝心な点の脱落等）この経過に何度も言及・強調しているの、拙稿の趣旨を読者に正確に理解してもらうために敢えて言及することにしたい。

氏によれば、大村泉編著『唯物史観と新MEGA版「ドイツ・イデオロギー」』（社会評論社、2018年10月）「を贈った黒滝の返礼は否定的であった。しかし否定の具体的な論拠が全く指摘されていなかったの、理由を聞かせて欲しいと依頼した」（本誌 No.30, p.115）。編著を「献本したとき黒滝正昭氏の返礼では私見を具体的な根拠をあげずに否定されていた。このため、理由を明らかにして欲しい、と返礼に返信した。黒滝氏の私見批判はこの返信への回答であったのかもしれない。」（同上 p.132）

この時の氏の返信には、こう書かれていた。上記大村編著「第五章[唯物史観の第1発見者]は黒滝さんのコメント（p.105以下）をも組み入れて展開したつもりでございましたが、ご理解がえられなかったようです。ただ、何ら具体的な根拠に言及することなく（私見を支える具体的な論拠に反証をあげることなく）、『発想は面白いけれども、論証が詰められていないというこれまでの私の評価を変えるものではありませんでした』と言われると、ただ『上から目線』の言いつばなしの感

想に聞こえます。・・・事柄が事実に関わるだけに、黒滝さんの『評価』の根拠、私見を否定する事実をご教示いただけると幸いです。できれば、論文の形で出して頂ければ、公開で議論もできます。」(2019年1月23日付黒滝宛てメール。[]部分、下線は黒滝。以下同様)。これに対する私の返事：「確かに、大兄論文に対する批判的書評論文を書いて、公開の場で議論する方が、学界にとって良いかも知れません。考えてみます。」(2019年1月26日付大村氏宛てメール)。こうして、大村氏の要請に応じて私は拙稿に取り組み、発表することにしたのであって、「返信への回答であったのかもしれない」といった曖昧なものではなかった。

なお氏がここで、大村編著第5章 p.105 以下は、黒滝のコメントをも組み入れて展開したつもりであったと言う、その中身とは「マルクス/エンゲルスの草稿執筆前の打ち合わせが十分ではなく、エンゲルスは絶えずマルクスの意見を聞きながら基底稿[最初に書き上げた原稿]を執筆した。だから多数の即時異文[基底稿作成過程で生じた書き損じや書きさし等]が生まれた」という推定、「基底稿本体ではなく、基底稿作成過程で生じた即時異文にのみマルクスの関与を認める推定」を指すということである。「これは、筆者が本章の骨子を国際会議や研究会で紹介したときに出た質問の一つである」と言うのである(大村編著 pp.105-106)。

私は、こうした大村氏主催の編著準備段階での大学院研究会に、これまで案内を受けて2度ほど出席、その場で自分の意見や疑問を遠慮なく率直に述べてきた。それは氏がよく知っていることである。大村氏による上記まとめ方には独特のバイアスがかかっているが、私の疑問は、草稿がエンゲルスの筆跡であってもマルクスとエンゲルスが議論しながら共同でその場で文章を作成しているのだから、それぞれが独立に論文を書く場合とは異なり、書きながら絶えず互いに意見が出て、その結果ひんぱんに文章の修正が生まれたのではないかとということであった。大村編著はその疑問に答える代わりに、「肝要なのは、即時異文の性格自体が、『エンゲルスがマルクスに相談したから即時異文が増えた』、という推断を許さないこと」だとして、修正の多さ・内容を専らマルクスの書き癖(エンゲルスのそれとは対照的)に還元する氏の持論を繰り返しているだけなので、その点は批判せざるを得ないのである。

もう一つ氏は、今回の「反論」で、「大村仮説の検討は、2019年8月23日に東北大学大学院情報科学研究科で開催されたオンライン版『ドイツ・イデオロギー』を紹介する国際会議のメインテーマの一つであった。しかしこの席では、出席した黒滝からの発言はなかった。この席で黒滝の主論点を直接聞くことができれば本稿のような批判は必要ではなかった。」と述べている(本誌 No.30, p.115)。これでは、私が発言しなかったがために氏が「反論」を発表せざるを得なくなったかのようである。予定報告者が次から次へと立って報告を行うこうしたシンポジウムの限られた時間に、本誌 No.29の拙稿や No.30の大村「反論」のようなこれだけボリュームのあるやり取りができる訳がないことは自明のことであろう。私が出席したのは議論するためではなく、大村編著以降の新たな論点が出されないかどうか確認するためであった。もし新たな論点があれば、それをも踏まえて拙稿を作成しなければならなかったからであるが、新たなものは特に無かった。ただし当日配布の氏の報告レジメ(A4判、5p.)は、氏の主要論点を凝縮・要約してあって、再確認のために大変役立った。

II 大村「反論」の構成に従った内容的吟味

大村「反論」の構成は下記のとおりである。

はじめに

1. 大村(2018b) [前掲大村編著第5章「唯物史観の第1発見者」のこと] の概要
2. führ[te] ⇒ für に関する黒滝の批判
3. なぜエンゲルスは最初間違っ**て** für を führ と書いたのか
4. 研究史上類例がない黒滝のマルクス/エンゲルス共同執筆説
5. daß ⇔ das に関する黒滝の私見批判
 - 5-1 M42 [草稿中マルクスのページ付けで42ページ] の事例
 - 5-2 M64 [同上64ページ] の事例
 - 5-3 M71 [同上71ページ] の事例

むすび

1. で大村氏は、編著第5章の概要を改めて自らまとめ、「草稿には、次のマルクス口述・エンゲルス筆記の可能性を示唆する特徴が存在する」(本誌No.30, p.116)として

(1) 即時異文の出現頻度が異常に高い。同時期のエンゲルスの単独稿の7倍弱、マルクスの単独稿に比しても2倍弱ある。(2) 即時異文の中には、同音異義語の書き間違いのように、口述筆記以外に原因を想定することが困難な事例がある。(3) マルクスの単独稿で即時異文の頻出回数がエンゲルスを3倍強上回るのは、エンゲルスが文章を頭の中で反芻してテキストを練ってから執筆するのに対して、マルクスは、書きながら考え、書いては消し、消しては書くという癖があるからだ。このためマルクスの単独稿ではしばしば定冠詞や不定冠詞、代名詞の性や格が急に変わったり、いったん削除された単語が、すぐに修飾語を伴って再現したりする 경우가多々ある。こうした事例をエンゲルスの単独稿に見出すのは容易ではない。こうした事例がH^{5c} [新MEGA (マルクス/エンゲルス全集), I/5, Berlin/Boston 2017による呼び名。草稿のマルクス自身によるページ付けで40-72ページの部分。ここでの即時異文は、すべてエンゲルスの筆跡] ではマルクス草稿に劣らず頻出するのは、「H^{5c}がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立した証左であろう」(同上)。

「可能性を示唆する特徴」が、ここでは「マルクス口述・エンゲルス筆記によって成立した証左」に格上げされている。

その上で、上記(1)~(3)の中でも(2)の同音異義語の混同を、「草稿の口述筆記をうかがわせる直接的な証拠とみていた。」(同上)と述べている。ここが**氏と私の根本的対立点**である。

大村仮説と黒滝仮説の対立点を割り切って図式化すると、以下のようになると思われる。

大村仮説：エンゲルスが「同音異義語の混同」・聞き違いにより誤って記述し、それを自ら訂正している箇所がH^{5c}に6箇所もある。ドイツ語を母国語とするエンゲルスが独立した著者として文章を書いているとしたならば、ドイツ語のこういう書き誤りは有り得ない。しかし、書いては消し、消しては書くという書き癖を持つマルクスの口述を、「同音異義」であるが故にエンゲルスが聞き

間違えて書いたと考えれば、何の不思議もない。これこそマルクスによる「口述筆記」の直接的証拠である。

黒滝仮説：エンゲルスが同音異義語を書き誤ることがあり得ないと同様に、それを聞き誤ることもあり得ない。互いに良く知った友人同士が、顔を突き合わせて議論している場でのことだからである。聞き誤ったのではなく、マルクスとエンゲルスの議論が大づかみなところで一致した元々の文章は、訂正前の通りであった。それをエンゲルスが口頭で確認しつつ書いていた、その途中で再び二人の間で議論が生じて中断。新たな文章に作り変えられた。こう考えると、不自然な「書き誤りの理由付け」をあれこれ案出する必要はない。

以下、両仮説の上記対立点を念頭に置きつつ読んでいただくと有難い。

III 「führ[te] ⇒ für に関する黒滝の批判」の節

大村氏は、「反批判に公正・正確を期すため」ということで、これに関連した拙稿部分全体をまづ引用して掲げている（本誌 No.30, p.117）：

「それでは、『führ[te]（動詞）と für（前置詞）の混同→ドイツ人なら起こりえない混同』（レジメ [本稿 I で言及した 2019 年 8 月 23 日開催の国際会議における大村報告のレジメ] p.4；編著 p.113.）と氏が強調する次の例はどうだろうか？ M48：Im Anfange bedingte die geringe cirkulirende Quantität des Goldes & Silbers die das Verbot der Ausfuhr dieser Metalle； & die | :durch die: | Nothwendigkeit der Beschäftigung ~~führ~~ für die wachsende städtische Bevölkerung | :nöthig gewordene: | meist vom Auslande importirte Industrie konnte der Privilegien | :nicht entbehren: | , die natürlich nicht | :nur: | gegen inländische, sondern nur hauptsächlich gegen auswärtige Konkurrenz gegeben werden konnten. 上記下線部が『混同』とされるが、この点に関しては大村氏は、明快とは言い難い次のような説明を付け加えている。

「『おそらくマルクスが、die Nothwendigkeit der Beschäftigung für と述べた際、やや間をおいたため、エンゲルスは die Nothwendigkeit der Beschäftigung führ[te] と書いたが、die wachsende städtische…Bevölkerung と続いたので führ を削除し für に置換したのでであろう』（編著 p.113. ここでの[]は大村氏）。これによると、マルクスが読み上げた際に für で切って間を置いたためエンゲルスは、マルクスが führte と言おうとして途中で切ったものと判断して führ まで書きかけたその時に、マルクスが für die…Bevölkerung と読み上げを再開したので、エンゲルスは自己判断の誤りを悟って慌てて führ を消し、für と書き直したということになるだろう。これは非常に不自然な想定であろう。マルクスがドイツ語の一つの単語の途中で読み上げを切ったなどと、どうしてエンゲルスは判断したのか？ドイツ語にもイントネーションというものがあるから、発音が同じであってもイントネーションで相手に違いが伝わるし、そもそもマルクスが読み上げたのだとして、führ- で読み上げを切るなどということはあるまいであろう。マルクスが読み上げたにしろエンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめ案は常に筆記より早く、数段先に進んでひとつの意味上の区切りまでは行くはずである（例えばこの場合、die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien まで行くなど）。訂正は、それを確認しつつ読み上げ・筆

記している間にまた別の考えが生じて、議論が起こり、合意に達して生まれるものであろう。」(黒滝 (2020) [本誌 No.29 の拙稿]、p.47-48) [下線は黒滝]。

ここまで引用した上で大村氏は、「まず全く理解できないのは、大村のこの想定がなぜ『非常に不自然な想定』になるのかである。黒滝がこの批判の冒頭で引用した原文はエンゲルスの筆になるものであり、そこではエンゲルス自身が、『führ を消し、für と書き直し』ている。大村はこの事実を出発点にしている。しかし黒滝にはこの事実を事実として認めることが『不自然な想定』になる。黒滝は大きな勘違いを犯している」というのである (本誌 No.30, p.118. 下線は黒滝)。

こういう議論でこんな所で、これほどの焦点のズレが生ずるとするのは、信じ難いことであるが現に生じている。「エンゲルス自身が、『führ を消し、für と書き直し』ている。大村はこの事実を出発点にしている。」[!?] これが事実であることを認めない人間は、いる訳がない! だから問題はそこにあるのではない。私が問題にしたのは「おそらくマルクスが、die Nothwendigkeit der Beschäftigung für と述べた際、やや間をおいたため、エンゲルスは die Nothwendigkeit der Beschäftigung führ[te] と書いたが、die wachsende städtische…Bevölkerung と続いたので führ を削除し für に置換したのであろう」という氏の推測の方であって、これが「事実」ではなく「推測」であることは間違いないであろう。この推測の中身が「不自然な想定」になっていると私は言っているのである。

ところが氏はそれに気づかないのか、編著に掲げていた草稿当該箇所¹の精細画像を再度掲げ、さらに問題の文章の始まりと終わりの部分を矢印で挟んで示し、エンゲルスが führ を二重線で消し、その後に für と書き直している箇所を楕円で囲んで示した上で、「大村の事実認識に誤りなどない。これは『不自然な想定』ではなく**確定している事実**である。大村 (2018b) の画像で**黒滝も知っているはずの事実**であり、自ら訂正を引用までしているのである。自家撞着した批判というほかない」と続けている (同上 p.118. 太字は大村氏)。画像の分かり易い再掲自体は、エンゲルスのドイツ文字筆記体に不慣れな読者のためには有難いことであるが、当面の議論の筋から言うと氏は、見当違いの方向に進んでいる。ただし、「黒滝への反批判をより説得的なものとするため、この箇所がどのように読めるのかを次節で示す」(同上 p.118) とも書いているので、上述の氏の議論では黒滝への反批判として十分説得力のあるものにはなっていない、と感じているようである。

IV 「なぜエンゲルスは最初間違っ²て für を führ と書いたのか」の節

この節では大村氏は先ず、前節で引用した M48 の文章のうち & die | :durch die: | Nothwendigkeit der Beschäftigung ~~führ~~ für die wachsende städtische ~~Bet~~Bevölkerung | :nöthig gewordene: | meist vom Auslande importirte Industrie konnte der Privilegien | :nicht entbehren: | , die natürlich nicht | :nur: | gegen inländische, sondern nur hauptsächlich gegen auswärtige Konkurrenz gegeben werden konnten. の部分が、4 度の執筆中断を挟んでそれぞれ必要な修正が加えられ、最終テキストが完成したという氏独自の分析を掲げている (同上 p.119)。これ自体は、文章の形成過程の分析としては興味深いものであるが、問題は、それが節題の「なぜ？」の答えにつながるかどうかである。

次いで本題に入って、「さて、führ (動詞 führen の語幹) と für (前置詞) の混同がここでなぜ生じたのか。耳から聞き、聞こえたように書くという口述筆記がそもそもの前提になる。[証明されるべき「口述筆記」が、ここでは初めから「前提」にされている]。しかしこの前提を置いて、なぜエンゲルスが混同したのか、その理由は問われる必要がある。[少なくともこういう問題が存在するという点では、黒滝の提起を氏は受け入れてくれたようである]。既述のように、黒滝は、ここでの即時異文 (= 修訂性 [正?]) の検討を怠っていた。この検討を行うと、この設問に対する妥当な解が自然に浮かび上がる」(同上 pp.119-120) と言うのである。

その「自然に浮かび上がる妥当な解」とはどんなものか? 「エンゲルスが führ (動詞) と記した箇所直前の die Nothwendigkeit der Beschäftigung (仕事を与えるというやむを得ざる事情) は、当初この文章の主語であった。führ は動詞 führen の語幹であり、文脈からすれば、ここに動詞の führen を書く。しかし彼は führ と書いてすぐ消し、für と記入した。これは、für に続く部分の内容 die wachsende städtische Bevölkerung (増大する都市人口) が、動詞 führen (を導く) の目的語にはならないと直感したからであろう。Bevölkerung は最初 Bet と書きはじめられ、すぐに消されているので、気づいたのは、この直前であろう。/まさに『エンゲルスは自己判断の誤りを悟って慌てて führ を消し、für と書き直した』のである。だから彼は、führ を führte と書く前に、すなわち動詞の語尾変化を記すよりも前に führ を削除して für (前置詞: ○○ために) に置換訂正したのである。もしマルクスが、die Nothwendigkeit der Beschäftigung を、この後で修正される die durch die Nothwendigkeit der Beschäftigung…と口述していた場合には、冠飾句に動詞が続くことなどあり得ないので、最初から für としていたであろう」(同上 p.120. 改行の / と下線は黒滝)。以上がすべてである。

これは一体「解」と言えるのかどうか? まず「おそらくマルクスが、die Nothwendigkeit der Beschäftigung für と述べた際、やや間をおいたため」という先の氏の推測は、どうなったのだろうか? ここではそれに関して一言の言及もないが、やはり氏もそれを「不自然」と考えて撤回したのだろうか? 「彼は führ と書いてすぐ消し、für と記入した。これは、für に続く部分の内容 die wachsende städtische Bevölkerung (増大する都市人口) が、動詞 führen (を導く) の目的語にはならないと直感したからであろう。Bevölkerung は最初 Bet と書きはじめられ、すぐに消されているので、気づいたのは、この直前であろう」というのは、氏による新たな推測である。Bet まで書いたところでエンゲルスは、自らの誤りを直感したというのであるから、マルクスは「間をおかなかった」ということになろう。

第二に、ここで氏が述べていることは、要するにマルクス口述の結果とされる出来上がった草稿の文章を前提にして、それをエンゲルスは誤解したということ、それに合わせて各語句を訂正しなければ文法上正しいドイツ語にならないからエンゲルスは訂正した、という議論に尽きるのではないだろうか? ところが氏のそもそもの設問は「なぜエンゲルスは führ と für を混同したのか?」ということであったから、これでは焦点のズレた説明になってしまって、その設問に対する答えにはならないであろう。従って、黒滝が検討を怠ったとして氏が批判する「ここでの即時異文の検討」を氏自身が行ってみた結果は、そういう検討では「妥当な解」にたどり着くことはできないということである。

V 「研究史上類例がない黒滝のマルクス / エンゲルス共同執筆説」の節

この節で氏は、再び拙稿から「マルクスが読み上げたにしろエンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめ案は常に筆記より早く、数段先に進んでひとつの意味上の区切りまでは行くはずである（例えばこの場合、*die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien* まで行くなど）。訂正は、それを確認しつつ読み上げ・筆記している間にまた別の考えが生じて、議論が起こり、合意に達して生まれるものであろう」という部分を引用して、「これは、上に詳しく述べた草稿異文の成立過程とは全く無縁の〔無縁〕ではない！草稿の文脈から導き出した草稿前段階の議論を再現してみたものである。』草稿成立過程のイメージである」と言う（同上 p.120）。

何が問題か？「そもそも、MEGA² I/5 に収録された草稿異文には、die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien という文章は存在しない [なぜ問題を、草稿異文にそのままの形の文章があるかどうかという狭い形式に限定するのか？異文は草稿確定直前の議論を反映するだけであるが、それと内容的につながるその前段階の議論というものがあるはずがある。そこで行われた議論を再現するためには、草稿当該箇所の前後の文脈を十分に検討し、異文を生み出す原因となった口頭でのやり取りを再現してみなければならない]。führte は führ と書かれ、語尾変化 te が記される前に消されている [消される前にエンゲルスは、führte と書こうとしたことは事実である。これを氏は認める。しかしなぜエンゲルスがそうしたか？上述のように大村氏は、それを説明できない。私の仮説はそれを説明するものである]。また、Industrie と den [der?] Privilegien の間には、konnte が初めから [文章化されたものの中には「初めから」入っていて Industrie konnte den [der?] Privilegien となっている。黒滝は、『マルクスが読み上げたにしろ、エンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめの案』が、MEGA² I/5 に収録された草稿からは独立に存在し、しかも『訂正はそれを確認しつつ読み上げ・筆記している間に』生じると想定する。黒滝の脳裏には、(マルクス / エンゲルスのいずれが出所か明確ではない [二人の議論が出所であることは明瞭！]) 『口頭で述べるまとめの案』を成文化したテキスト [「成文化したテキスト」など、私の脳裏には見当たらない。恐らく大村氏の脳裏にはあるのだろう] が別途存在することになる [そういう論法を使うのであれば、氏の所謂「マルクスの口述 = マルクスが口頭で述べる案」を成文化したテキストもまた、MEGA² I/5 に収録された草稿とは別に存在しなければならないだろう。前拙稿で紹介したように、実際 MEGA² 編集者たちは、「まず最初、マルクスの一草稿 (ein Entwurf) があったのであろう」と推定しているのである。MARX-ENGELS-JAHRBUCH 2003, Berlin 2004, S.168; 本誌 No.29, p.53, p.55, p.59-注 12, 13]。研究史でこうした草稿の存在が報告されたことはない [当然！]。黒滝のように MEGA² I/5 に収録された草稿とは別の、マルクス / エンゲルスいずれか出所不明の草稿 [この言い方！] が存在し、その草稿の改良バージョンが MEGA² I/5 に収録された草稿であるという主張 [黒滝はそもそも、そういう主張をしていない。大村氏が勝手に黒滝に押し付けた主張] を肯定する研究者はいない (同上 pp.120-121. 下線と [] は黒滝)。

ここは非常に重要な問題に関わってくる。予め『口頭で述べるまとめの案』を成文化したテキスト」などというものは、存在する訳がない。マルクスとエンゲルスの間の議論は口頭で行われる

のであって、それぞれが書いたものを見せ合って行われる訳ではない。これはマルクス、エンゲルスに限らず、我々が議論しながら共同で意見をまとめていく場合には、普通に行われることであろう。まとめも口頭で、両者の頭の中で形成される。それを文章化する場合に初めて書く作業が必要となるが、その際に文案を口頭で出し合って、筆記を担当するエンゲルスは、文章を共同で確認しなければならないので、必ず声を出しながら書き進めることになるだろう。

以上の議論にさらに注(11)を付して、大村氏は次のように述べる。「黒滝(2020)は、黒滝独自の共同執筆説を、『マルクスとエンゲルスが同じ時間・同じ場において議論を続けながら共同で文章を創っていく草稿共同作成過程』(p.57)ともイメージしている。明瞭な定式化は存在しない [どこが不明瞭?] が、黒滝自身は、マルクス/エンゲルスがワンセンテンスずつ述べ合って [「ワンセンテンス」に限定する必要はない] MEGA² I/5 に収録された草稿の草案を書き、それをさらに修正して MEGA² I/5 の収録草稿に仕上げたと見ているのであろうか [初めからそう述べている!]。『ドイツ・イデオロギー』草稿の膨大な分量と、その作成時間の短さ、またマルクス/エンゲルスの当時の多忙を考慮すると、黒滝のこうした想定は、甚だリアルさを欠く [!?]」(同上 p.130)。

漸く拙稿の趣旨をほぼ正確に紹介してくれたかと思うと、今度は『ドイツ・イデオロギー』草稿の膨大な分量と、その作成時間の短さ、マルクス/エンゲルスの当時の多忙さ等々、物理的諸要因を列挙して、「甚だリアルさを欠く」(マルクス/エンゲルスに、そんな余裕など無い、ということか)の一語で「黒滝の想定」を片付けている。逆に言うと、これ以外に「黒滝の想定」を退ける理由を氏は挙げられないということであろう。しかし「書きながら考え、書いては消し、消しては書くという癖がある」マルクス(本誌 No.30, p.116)が、氏の想定通りこのままの癖を発揮して口述するとすれば、それにエンゲルスがそのまま付き合っ、筆記しては消し、消しては書き、マルクスが考える時間は筆を止めるというやり方で、一体どれほどの時間を費やすことになるか? それこそリアルに考えてみるべきであろう。

拙稿で言及した(本誌 No.29, p.46, p.58)ブリュッセルにおける当時のマルクスとエンゲルスの仕事ぶり、それを伝える証言の中に、二人が夜中あんまり大笑いしていたので家の者が皆眠れなかった、というヘーレナ・デームート(マルクス家の家政婦)の証言があったことを、エンゲルスがラウラ・ラファルグ(マルクスの次女)宛て手紙(1883年6月2日付)で伝えていた。夜中まで議論しながら大笑いする余裕があったということであろう。この手紙の中でもう一つ注目しておきたいのは、エンゲルスが「モール [マルクスのあだ名] の書類の中にひと山の手紙を見つけました。1848年以前にわれわれが共同で書いた仕事(our common work)です」(下線、[] は黒滝)と書いているところ。これらは、大村氏の「マルクス口述・エンゲルス筆記」説にとって不利な証拠となるものであろう。しかもこれらの資料は MEGA² I/5 (Berlin/Boston 2017) の Einführung で紹介されており、大村氏を含む4人の訳者が共同でこの Einführung 全体を邦訳しているのである(MEGA² I/5, S.751; 『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第60・61合併号、八朔社2019年6月、pp.96-97, pp.137-138)。

しかし大村氏は、黒滝批判に余念がない。「黒滝の批判では、黒滝が『不自然』と思えば、エンゲルスによる同音異義語の訂正という事実そのものが雲散霧消するかのようになっている」(本

誌 No.30, p.121. 太字強調は大村氏。同じズレた主張を氏は何回繰り返すのだろうか?)。

「黒滝 (2020) はその批判の結論部分で、大村の見地は、『[これでは] エンゲルスは [,] 自主的でも自発的でもなく、自分の意思も無く、自分の頭を使うことも無く、受動的にマルクスの口述するところをただ [ひたすら] 筆記したことになってしまう。[これが唯一無二の解決だというのは、] 荒唐無稽な話 [になろう]』 (p.57) だとしている。黒滝は大村 (2018b) [大村編著のこと] がエンゲルスを dictating mashine [machine?] (自動音声入力機) に貶める暴論であり承認することができないというのだろうか」(同上 p.121. 下線と [] は黒滝。その他引用の不正確な箇所は全て原文に戻した)。氏はここで、黒滝が「大村の結論は『荒唐無稽』」であると述べているものと受け止めている (本誌 No.30, p.115)。

拙稿のありのままの論旨を、氏は何故捉えられないのだろうか? 「大村の見地」や「大村の結論」が「荒唐無稽」だと、私はここで述べているか? 上述引用に際して [] 内の大事なつなぎの文章を氏は勝手にカットするので、理解が短絡してしまうのかも知れない。まず、上記「これでは」という語句は何を指していたか? 大村氏の次の文章である。

「矛盾というのは、草稿同章の筆跡から著者がエンゲルスであるとすれば、エンゲルスが、**自主的かつ自発的に彼の意味で (彼の頭で)**、草稿同章に残る唯物史観の諸定式を書いたことになる。しかし後年、これを否定する証言 [「唯物史観の第1発見者はマルクスであることを繰り返し明言」] をしているからである。この矛盾を解消する唯一無二の方法は、草稿同章がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したことを論証すること・・・である」(大村編著 p.77. 下線、太字は黒滝)。すなわち私は「大村の見地」を問題にしているのではなく、氏が具体的に述べていることを確認しているだけである。

「[これが唯一無二の解決だというのは、] 荒唐無稽な話 [になろう]」の方はどうか? 「草稿同章がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したことを論証すること」が「**唯一無二の方法**」だというのは、それ以外の論証を認めないということになるから、それは荒唐無稽な話になろうと述べているのである。

因みに私は、以上の氏の文章は、氏の結論「マルクス口述・エンゲルス筆記」説を強調せんとする余りの「勇み足」と受け止めている。だから、そうした「脇道」に逸れてはいけないと書いたのである (本誌 No.29, p.57)。

VI 「daß ⇔ das に関する黒滝の私見批判」の節

(1) M42 の事例

ここでは、エンゲルスがマルクスの口述中 das を daß と聞き間違えて書いた例として大村氏がまず挙げている M42 (マルクスのページ付けで 42 ページ) の語句に関して、私が掲げた草稿の文章が再掲される。

Die Trennung von Stadt & Land kann auch gefaßt werden als die Trennung von Kapital & Grundeigentum, als der Anfang ~~de~~ einer vom Grundeigentum unabhängigen Existenz & Entwicklung des Kapitals, na eines

Eigentums dessen daß das bloß in der Arbeit & im Austausch seine Basis hat.

そしてこれに関する拙稿の説明：「この下線を施した部分が、daß と das の混同とされる最初の例である。しかしこの場合は、元々 dessen に続く文章になっているので、指示代名詞 dessen によって代理される 2 格の補足語としての daß 節が、一定の区切りまで最初口頭で述べられたのであろう。それを記述途中で関係文に直したわけで、聞き間違いによる das との混同の例としては不適格と言わざるを得ない。」が引用されている（本誌 No.30, p.122）。

以上に対する大村氏の批判：この説明でまず疑問なのは、dessen daß といった言い方はめったに聞かない言い方で、マルクス/エンゲルスにはほかに用例があるのか。しかしこうした疑問は、黒滝の眼中にはない [!]（同上）。[ほかに用例がなければ黒滝の議論は成り立たない、というのであれば理解できるが、ここでの議論には何の関係もない事柄を持ち出してきて、これは「黒滝の眼中にはない」と私を非難して、何の意味があるのか？ 事実氏は、すぐに他の論点に移って行く。なお念のためマルクス、エンゲルスの時代に出版された辞典に、Ich freue mich Dessen, daß er kommt. という用例が載っていることを紹介しておきたい（Daniel Sanders, Wörterbuch der Deutschen Sprache, 1.Band, 2. Unveränderter Abdruck, Leipzig 1876, S.285. 私は三修社の復刻版を利用）。少なくとも dessen の後に daß を書いたのはエンゲルスが das を daß と聞き違えたためだ、という短絡的な理解は回避できるであろう。

次いで氏は、MEGA² I/5 のこの箇所の説明を photocopy を掲げて説明する。そこでの異文表記が Eigentums <dessen>, <daß> となっている。下付きのスラッシュ「/」が付記されている「この表記は、dessen 及び daß という 2 つの即時異文が草稿では、Eigentums という単語の直後に [この順序で] 記されていることを示す [これは氏の掲げる草稿の精細画像によって確認できる]。つまり、エンゲルスは、Eigentums という単語をかいたあと、指示代名詞 dessen を書き、すぐ削除、さらに接続詞 daß を書きこれもすぐに削除した。daß を削除したあとどうしたのか。MEGA² I/5 は、Eigentums の後に残っている関係代名詞 das を書き、この文章を hat. まで書き進めたと考えている。全体をつづめて言えば、dessen を書いたがすぐそれを消し、さらに daß を書いたが、それも消し、daß を das に置換訂正してこの文章を仕上げた。[そんなことが現実にあるか?] これが MEGA² I/5 の理解である [本当か?]]（同上 pp.122-123. 下線及び [] は黒滝）。

さらにダメ押しをするかのように氏は「ここで注目すべきは、dessen（黒矢印）daß（灰色矢印）が一括して削除されず、独立に削除されていること [これは氏が掲げた精細画像に両単語が直ぐ分かるよう 2 種類の矢印をそれぞれ書き込んでいるのを指しており、その通りである。これは分かり易くて有難い]（MEGA² I/5 の即時異文表記はこのことが念頭にあるからであろう [先ほどは「これが MEGA² I/5 の理解である」と断定されていたものが、ここでは「このことが念頭にあるからであろう」というふうに推測に変えられている [!] ことに注目すべきであろう)」、daß の das への置換訂正は、ß（ドイツ文字のエスツェット）だけが小文字の s（旧字体）に書き換えられていることである。全文引用した黒滝の草稿理解がいかに独りよがりで、根拠が無いかが分かるだろう [ここは再び断定に変わっている!]]（同上 p.123.）。

ここで最大の問題は、「エンゲルスは、Eigentums という単語をかいたあと、指示代名詞 dessen を書き、すぐ削除、さらに接続詞 daß を書きこれもすぐに削除した」、すなわち「dessen を書いた

がすぐそれを消し、さらに daß を書いたが、それも消し、daß を das に置換訂正してこの文章を仕上げた」という氏の認識にある。dessen を書いてすぐそれを削除、削除した後に daß を書いた？ そんなことはあり得ない！ dessen があるからこそ daß が生きてくるのであって、dessen を削除してしまったら daß は文脈上前後の文章とつながらず、全く無意味になる。それをエンゲルスが書くということは、絶対にあり得ない。したがってエンゲルスは、dessen daß と一続きに書いたのである。その場合 daß 以下の名詞節が既にエンゲルスの頭に無かったら、こういう記述はできない。ところが daß まで書いたところで、その名詞節を、関係代名詞 das を使った関係文に変更することにしたのである。そのためには dessen daß を一続きに削除して、das に置き換えねばならない。その際エンゲルスは、上述のように dessen は全体削除したが、daß の方は da を生かし、ß の上に s を重ね書きする仕方で訂正した。

私が dessen-daß と表記したのは、こうした経過を簡略化して示したのである。しかし MEGA² I /5 は、一続き削除であっても dessen と daß それぞれの訂正の仕方が異なることを伝えようとした。そのため大村氏は、MEGA² I/5 を上述のように誤解したのである。「全文引用した黒滝の草稿理解がいかにかに独りよがりで、根拠が無いかが分かるだろう」と言うのであるが、全文引用したからこそ草稿の前後の文脈を考えられるのであって、氏のように当該箇所を含む一部分のみ切り取った事例を掲げて、エンゲルスによる das と daß の混同を結論付けようとする、こうした独りよがりの思わぬ落とし穴に嵌るのであろう。

(2) M64 の事例

ここでも大村氏は、まず拙稿を引用している：Hieraus erklärt sich auch das Faktum daß das man | :in der Zeit: | nach der Völkerwanderung überall bemerkt haben will, daß nämlich der Knecht der Herr war, & die Eroberer von den romanisirten Eroberten Sprache, Bildung & Sitten sehr bald annahmen. 下線部分が、daß と das の混同とされる。しかしそれは、das 以下の関係文が出来上がったことを前提にすればそうも言えるという結果論であって、当初は直接、関係文なしに2行目の daß nämlich der Knecht der Herr war…に続く文章として読み上げて(マルクスが読み上げたとは限らない。エンゲルスが自分で二人の議論をまとめながら、読み上げつつ筆記し、それを聞きながらマルクスが再考して、さらに意見を述べたのかも知れない)、それを書いていた途中で、いや関係文をつけて説明を加えた方が良いのではないか、と議論が出て、それが良さそうだと判断して書き換えたという可能性もある。(本誌 pp.123-124. 下線は黒滝)

ここまで引用した上で氏は、これに批判を加える。「この黒滝の批判では、『当初は直接』以下に続く次の推定 [上記下線部分] に看過できない論理の飛躍[?]がある。」「もし黒滝の主張どおりに執筆が進んでいたとすれば、das Faktum daß nämlich der Knecht der Herr war…と言う記述が『筆記』されたもの、紙面に記述されたテキストとして存在しないと筋が通らない [そこが誤読！すべて口頭でのやり取り!]。黒滝は、こうした一文をエンゲルスは、『読み上げつつ筆記し』と述べ、さらに続けて、『それを聞きながらマルクスが再考して、…それを書いていた途中で、いや関係文をつけて説明を加えた方が良いのではないか』と述べたので[?]最初の“daß” (接続詞) が“das” (関係代名詞) に変わった [氏の言う通りであれば、das Faktum daß nämlich der Knecht der Herr war, という、文法的に成り立たない文章になってしまうだろう!] と推定しているからである。」(同誌 p.124. 太字は大村氏。下線、[]は黒滝)

ここで氏は、さらに当該箇所の草稿精細画像を掲げ、それぞれの daß に黒・灰色の矢印を付けて示した上で、「黒矢印を付した daß の das への置換訂正直後の文章は、nämlich der Knecht der Herr war…ではなく [氏による「論理の飛躍」?!]、黒滝の引用文にあるように、man nach der…である。daß nämlich der Knecht der Herr war…は灰色矢印以後である。この批判を合理化するには、黒滝は、ここでも既述の **MEGA² I/5 に収録された草稿とは異なる草稿テキストの存在を実証する**必要がある [ここでも氏は、ズレた結論を太字で強調することで終わっている] (同上)。

最後にまたダメ押しが来る。「念のために附言すると、MEGA² I/5 のここでの異文表記は Faktum <daß> である (MEGA² I/5, S.935)。黒滝は、この MEGA² I/5 の記述を確認している。したがって、黒滝は、MEGA² I/5 編集者が、ここでは、エンゲルスが daß を書いてすぐ消し、das に置換して次に続けたと草稿を読んでいることを知っている。大村 (2018b) [大村編著のこと] はこのことを確認し、ここでは同音異義語の訂正がなされている [その前に、エンゲルスが何故 daß を書いたのか? これを説明しなければならないであろう]、このような訂正はエンゲルスがマルクスの口述したテキストを筆記していると想定する以外、合理的な解釈はできないと判断した [それが独断!]。この批判もまた黒滝の思弁にのみ存在する草稿テキスト [「紙面に記述されたテキスト」は「黒滝の思弁」にも存在しない!] **に基づく批判**でしかない。(同誌 pp.124-125. 太字は大村氏。[]は黒滝)。

大村氏は、エンゲルスが速記者の如くマルクスの口述を、口述と同じスピードで筆記したものが『ドイツ・イデオロギー』草稿だと考えているようである。「エンゲルスは、まさに、正確無比にマルクスの口述を再現する dictating mashine[machine?] といえるのではないのか」(同誌 p.121) という訳である。そしてこの作業中、二人の議論は全くなく、マルクスの口述がすべてである。「大村 (2018b) が想定しているマルクス口述・エンゲルス筆記の場合、書き写している間はエンゲルスの側に自由はない。・・・小休止の号令があるまで口述筆記では前に書いたことを読み返す余裕はない。・・・独裁者を英語では dictator と書くが、これが dictate (口述する) から派生した言葉であるのは容易に察しがつく」(同誌 p.126)。これが氏のイメージである。

ところがそう言いながら氏自身、それでは解決できない事態に直面する。本稿Ⅲ、Ⅳ節で扱った M48 草稿の次の部分である (本稿 p. 34 参照)。

& die | :durch die: | Nothwendigkeit der Beschäftigung ~~für~~ für die wachsende städtische ~~Bet~~Bevölkerung | :nöthig gewordene: | meist vom Auslande importirte Industrie konnte der Privilegien | :nicht entbehren: | , die natürlich nicht | :nur: | gegen inländische, sondern nur hauptsächlich gegen auswärtige Konkurrenz gegeben werden konnten. の部分で、「& die の直後に durch die の挿入を指示するとき、当然 2 人の間でやりとりがあったと見るのが常識的である。durch die の挿入によって、主語が Nothwendigkeit から Industrie に変わった。この主語に対応する動詞 nicht entbehren はあとの挿入である。Privilegien を規定する関係代名詞 die 以下末尾までの従属節をマルクスが口述したので急ぎエンゲルスが筆記したからであろう。あるいは、主語に対応する動詞が存在しない文章はそもそも存在しないから、マルクスは口述していたが、エンゲルスは聞き漏らし、あとから確認して補った可能性もある」(同誌 p.121)。

「durch die の挿入を指示するとき、当然 2 人の間でやりとりがあったと見るのが常識的である (!?) 「書き写している間」であっても、必要に応じてやり取りがあるのが当然! これを認める

ならば、問題全体の見方がガラッと変わるはずである。氏は「やりとり」をこのケースに限りたのであろうが、そこに限定しなければならない理由がどこにあるのだろうか？ 草稿のあらゆる修正（及び修正前の語句も）は、その時々が必要に応じて行われた（書かれた）に違いない。氏の場合は、精細画像によって草稿に実際に書かれてあることが確認できる？ しかしあらゆる修正箇所は、同じように草稿上で確認できる。問題は、それを踏まえてどのように仮説を組み立てるかにある。

「動詞 nicht entbehren はあとからの挿入・・・Privilegien を規定する 関係代名詞 die 以下末尾までの従属節をマルクスが口述したので急ぎエンゲルスが筆記したからであろう」。この下線部は、事実ではなく大村氏の推定である。さらに nicht entbehren の挿入に関して「マルクスは口述していたが、エンゲルスは聞き漏らし、あとから確認して補った可能性もある」といった推定、名詞の変化語尾（『聞き漏らし、ないしは聞き違い』の具体例として、次のような事例が[氏の] 念頭にあった。例えば、M52 の in jeder Lokalitaten eines Landes ⇒ in jeder Lokalitat eines Landes の変更、つまり複数形の Lokalitaten 末尾の en を削除して単数形 Lokalitat に変更している事例など」、同誌 p.129) どころか nicht entbehren という動詞の語句丸々一つをエンゲルスが聞き漏らしたといった、信じ難い推定まで行って氏は自己の仮説を組み立てているのである。

これに対して黒滝仮説は、本稿第Ⅲ節で見たように、草稿上で確認できる fuhr fur の訂正をエンゲルスによるただの聞き誤りとして片付けるのではなく、当初彼は fuhrte と書くはずであったと肯定するところからスタートする。それでは一体どういう文章が彼の念頭にあったのか？ これを推測するためには、草稿のその前後の文脈を十分読み込んで、マルクスとエンゲルスが何を主題にここで議論を交わしていたかを把握し、草稿の文章を基に fuhrte が入った文章を組み立ててみなければならない。草稿を離れて勝手に組み立てる訳にはいかない（所謂「タラレバ」で出来るものではない）。それがこの場合、die Nothwendigkeit der Beschaftigung fuhrte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien. という、骨組みとなる文章である。

これは勿論私が推定して組み立てた文章で、仮説の域を出るものではない。しかしこういう仮説を立ててみると、エンゲルスが fuhrte と書こうとしたことは極めて自然に受け入れられるのではなからうか？ さらにこの骨組みに具体的な肉付けが必要だということで議論になり、文章が変更された。それが丁度エンゲルスが fuhr まで書いた時だ、という風に仮説をもっと先に進めていくことができるであろう。

(3) M71 の事例

ここでも大村氏は、拙稿の当該部分の引用から始める。「最後に M71 の事例：Das jus utendi et abutendi selbst spricht einerseits die Thatsache aus, das da das Privateigenthum vom Gemeinwesen durchaus unabhangig geworden ist, & andererseits die Illusion, als ob das Privateigenthum selbst auf dem bloen, unumschr Privatwillen | :der willkuhrlichen Disposition uber Sache: | beruhe. この場合の das と da は、口語体で da を飛ばして das Privateigenthum…と書こうとして、思い直して da に書き換えたような印象を受ける。」（黒滝（2020）、p.47）

これに対する大村氏の批判：『『思い直し』た人物、・・・ここでの主語は、エンゲルスである。spricht … die Thatsache aus, と書き、die Thatsache の前に einerseits とまで書いたのがドイツ人で、彼がこの文章

の真の著者なら、すなわちこの文章は、口述筆記ではなく、著者であり筆者でもあるドイツ人のエンゲルスが書いているなら、() の直後に書くのは die Thatsache を説明する従属節の開始を告げる daß である [それ程明白なことであるなら、ドイツ人エンゲルスが、その daß を das と聞き誤ることもあり得ないのではないか?]。急に『口語体』を持ち出すのは [マルクスとエンゲルスは初めから口語で議論しながら共同で文章を創り上げているのであって、書き言葉で議論している訳ではなからう]、黒滝が大村 (2018b) を否定するためには何でもありの状況になっている [何という言い方!] からではあるまいか。ここ [で] までずっと論文調 (書き言葉) で書いてきて、ここで急に口語体 (話し言葉) に変わった、だから最初 das となった、というのは余りにも『不自然』というものだ。急に口語体になった事例を前後でほかにも数カ所 [1~2カ所程度はあるかも知れないという心配からか?] 挙証しないと、黒滝説には説得力はない。(以上、本誌 No.30, p.125)

この位黒滝を批判すれば十分そうに思われるが、氏はここが攻めどころと考えたようで、さらに拙稿の注7) (この点に関する渋谷 正説批判) を全文引用した上で、同じ趣旨の批判を一層テンション・アップして繰り返している。長文になるが、先ず当該拙稿を再掲する:「渋谷氏は後に、これはエンゲルスによるマルクスの口述の聞き誤りと考えるほか無いと判断し、その理由を以下のように詳論している:草稿の筆者のエンゲルスは、一旦“das”と書いた直後に、この“das”の末尾の“s”に“ß”を書き重ねて (即時異文) 定冠詞の“das”を接続詞の“daß”に変えたのである……。<書き重ね>によるこの変更の理由は、die Thatsache aus のあとに記されるべき単語は、ドイツ語の文法と文脈から見て、関係代名詞の“das”でも定冠詞の“das”でもありえず、“die Thatsache” (事実) という名詞の付加語を導く接続詞の“daß”でなければならないということにある。なぜならば、die Thatsache aus のあとの単語が関係代名詞であれば、先行詞となるべき die Thatsache が女性名詞であるのだから、関係代名詞は das ではなく die でなければならない。他方、定冠詞の das の場合には、定冠詞の“das”の直後に再び定冠詞の“das”が書かれることはありえないからである。/ドイツ語の文章を自ら起草するドイツ人が、上述のように、最初に定冠詞の“das”だけを書いて、直ちにそれを同音異義語の“daß”に書き換えて、その前の名詞である“die Thatsache”の内容を説明する副文章を書き続けるなどというのは、およそ考えられないことである。この即時異文は、大村の言うように、『同一の著者、それもドイツ人である同一の著者に由来すると通常考えることができない即時異文』というほかなく、口述筆記によるエンゲルスの聞き誤りと考えるのが、もっとも自然なように思われる (編著 pp.161-162. /は段落改め。太字は原文)。

以上の渋谷説は、文法の説明それ自体は正しいが、問題は、ドイツ人であるエンゲルスが通常有り得ないミス、聞き誤りならば簡単に犯してもそれは自然だという氏の判断にあらう。出来上がった文章を前提にして文法問題を論じるのではなく、そもそもそういう聞き誤りはありうるのか? と、疑問を持ってしるべきではなからうか?」(黒滝 (2020)、p.58)

次いで、これに対する大村氏の批判:「ここでは大村 (2018b) の立場を支持した渋谷に批判の矛先が向けられている。黒滝は、文法的な説明は、渋谷が無条件に『正しい』と断じる。しかし、『エンゲルスに<この挿入は大村氏>』そもそもそういう聞き誤りはありうるのか?』という疑問を持たないのは許せない、というのである。『許せない』などとどこに書いてあるか? そもそもこれは、許す・許さないの問題か?。渋谷はここでマルクス口述・エンゲルス筆記説に立っているのだから、黒滝がわざわざここにこ

うした注記をするなら、エンゲルスは、マルクスの同音異義語の口述であっても、決して『聞き誤り』をしない [そういう一般論の問題ではない！ドイツ人著者が書く場合には通常あり得ない誤りであるとあれほど強調される具体的なこの誤りが、同じドイツ人が聞く場合には「あり得る」とあっさり認めてしまう理由はどこにあるのか？これを問題にしているのである。] ことを本文で論証すべきであったろう。本文では口述筆記は全く横に置き [意味不明！同音異義語の「聞き違いによる誤り」と断定するのは一面的、と拙稿本文に書いた (本誌 No.29, p.47) のは、口述筆記説批判以外の何物でもない。、(主語のエンゲルスを明記せず [文脈から自明すぎるほど自明！何故そんなことにこだわるのか？]) 急に書き方が論文調から口語体 (会話調) に変わったといって済ます [前述のように黒滝仮説では、マルクスとエンゲルスは初めから口語で議論しながら共同で文章を創り上げている。急に書き方が変わったという問題ではなく、無意識に口語が文章に入り込むことはあり得るように思われる。] のである。口述筆記の場合、同音異義語で『聞き誤り』がありうるのは洋の東西を問わない [そういう一般論を述べても、個々の具体的なケースにおいて同音異義語の「聞き誤り」が「書き誤り」の原因だという証明にはならない。これが問題]。これはもはや批判ではなく、ただの難癖であろう (以上、本誌 No.30, pp.125-126.)

もし本当に「ただの難癖」であれば、それに応える必要もなく切り捨てて済むところであろうが、しかし大村氏は、続く段落で渋谷氏に代わって拙稿の提起に答えている。一部は別の文脈で省略しつつ既に引用したが、ここでは重要なので省略無しに全体を再度引用する：

「大村 (2018b) が想定しているマルクス口述・エンゲルス筆記の場合、書き写している間はエンゲルスの側に自由はない。spricht … die Thatsache aus, と書き、また die Thatsache という言葉の前に einerseits とまで書いているのだから、続く『ダス』という言葉は、daß であるのが普通だし、文法通りならこれ以外にない。しかし、小休止の号令があるまで口述筆記では前に書いたことを読み返す余裕はない。仕上がった文脈、文法的には daß であっても、『ダス』を das と聞き違い書き間違えることはあり得る。ドイツ人の使う『ダス』で一番多用されるのは冠詞の das である。ここではマルクスが『ダス、ダス』と続けたので [そうであればエンゲルスは、初めから daß と書いたであろうから、置換訂正の必要も無かったのではないか？]、慌てて最初の das を daß に置換訂正した、というのがもっとも合理的な理解[?]であろう。独裁者を英語では dictator と書くが、これが dictate (口述する) から派生した言葉であるのは容易に察しがつく」(同誌 p.126)

以上の大村氏の批判全体に何故私が納得できないか？折々に[]で挿入した私の寸評で読者には伝わるのではないかと思われるので、改めて繰り返すことは省略したい。ただここでも大村氏が、問題箇所の精細画像を矢印付きで再掲してくれているのは、資料として大変有難い。

VII その他の論点

以上で大村氏の本論に沿った検討は終わりであるが、他の幾つかの論点が注で詳論されているので、本節ではそれを拾って回答したい。

まず草稿研究の方法論に関わる注(5)の論点を検討しよう。「大村 (2018b) が掲げた即時異文の諸類型 [(1)同音異義語の書き損じ(2)定冠詞・不定冠詞の削除と置換(3)直ちに復活する削除訂正] への黒滝

の批判 [について]・・・①この即時異文の諸類型に関する議論は、即時異文の頻出度がマルクス/エンゲルスの単独稿に比べて多すぎるといふ議論の系論である。問題の性格から、こうした②大村の主張へのもっとも有力かつ内在的な批判は、マルクス/エンゲルス双方の単独稿を探索し、大村の文献実証の結果を否定するマルクス/エンゲルスの単独稿を発掘することであろう。しかし黒滝はそうした探索を一切試みない。③黒滝が固執するのは、異文の内容上の差異[?]である。④大村(2018b)の主題は、草稿のテキストがマルクスに由来するのがあるいはエンゲルスかを、内容の差異を捨象して、書誌上の事実関係に限定して探るところにある。大村が、即時異文の内容的差異を論じていないことを如何に問題にしても無い物ねだりの批判を超えない。この種の議論は、問題を拡散させるだけで最後は見解の相違で終わるのが関の山である。⑤事実はひとつしかないのだから、解釈の相違に拡散しなくて済む研究の枠組みで、黑白決着を付けるようにすべきである。これが大村の問題提起の出発点である。黒滝の批判は、この肝腎な問題が理解できていないように思われる。」(本誌 No.30, p.128)

以上がすべてである。下線部①、②から観ていく。「即時異文の頻出度がマルクス/エンゲルスの単独稿に比べて多すぎるといふ議論の系論」というこの「系論」とはどういう意味か? 「即時異文の諸類型に関する議論」は枝葉の議論であって(実際には枝葉どころか、氏の仮説の要石を成している)、そんなものを取り上げて何も出て来ない、大本の「即時異文の頻出度」を自分で調べろ! という意味か? 下線部②を見ると、そういう趣旨にも聞こえる。しかし「即時異文の諸類型に関する議論」は、大村氏が自分でやっている議論であって、私が建てた議論ではない。それにも拘らず、そこをいくら批判しても「無い物ねだり」で「最後は見解の相違で終わるのが関の山」だと言うのは、無責任そのものである。私が氏の勧める「探索」を試みないのは、そもそもそれで解けるような問題ではないと考えているからであり、また氏の編著がそれを自ら実証していると観ているからである。

しかしまた「系論」というのは、数学でいう「定理」と「系」のような、もっと中身のある話なのか? すなわち「即時異文の頻出度」の調査結果(定理)から直ちに導かれる「即時異文の諸類型(いずれも「マルクス口述・エンゲルス筆記」の証左とされる)」「(系)」という意味か? しかし氏のこれまでの議論を精査した限り、「即時異文の頻出度」の調査結果と「即時異文の諸類型」との間には、そのような論理的に導かれる関連は見出されず、結論を先取りした推定で氏の仮説が成り立っているということを私は見てきた。

下線部③については、「異文の内容上の差異」という意味がよく分からない。私が前拙稿で問題にしたのは異文の「内容」ではなく、異文が生まれた原因として氏が挙げている「同音異義語の書き損じ」等々、それらが本当にその原因になっているかどうか? という点にあったからである。

下線部④、⑤について。大村氏が「書誌上の事実関係に限定して」行ったマルクス、エンゲルスの当時の単独稿の手書き草稿と『ドイツ・イデオロギー』第1章草稿との間の即時異文の出現頻度の量的相違の調査、これに関しては、敬意を表しこそすれ、異を立てる理由は全く無い。こうした調査が多大な労苦を要する困難な仕事であることは、多少とも関連した仕事を経験したことのある者は身に染みて味わってきたことである。従って、その成果として報告される事実関係に関しては「事実はひとつしかない」と確かに言えることである。

問題は、「草稿のテキストがマルクスに由来するのがあるいはエンゲルスかを、・・・書誌上の事実関係に限定して探る」ことが氏に出来ていないことにある。《即時異文が多いというマルクスの「書き癖」がそのまま「喋り癖」となってマルクスが口述するもので、元々即時異文が少ない「書き癖」を持つエンゲルスでも、マルクス口述の筆記者としては即時異文が異常に多くなる》これはもはや事実ではなく、氏による推定に他ならない。この肝腎な点が氏に理解できていないのに、氏の眼には「黒滝の批判は、この肝腎な問題が理解できていない」というふうに、逆立ちして投影されるのである。

次に注(7)の論点。「[マルクスの口述は書かれなかった名詞以降まで続いていたと見るべきで、削除された冠詞でマルクスが口述を止めたという想定は、非常に不自然という] ①黒滝の批評は、マルクスが冠詞だけ口述し、冠詞とセットになっている名詞を述べないのは通常あり得ないという前提がある。しかし『経済学・哲学手稿』には、本来なら書かれるべきはずの名詞が一切書かれることなく、冠詞が削除訂正されている事例を容易に見出すことができる。マルクスの脳裏に、削除された冠詞とセットの名詞が浮かんだとしても、テキストにしない(口述しない)事例もあったというべきである。・・・黒滝は繰り返し、マルクス/エンゲルスが書こうとしたものを探求し、訂正の意義を解明するのが必要だという。しかし学術研究では、書かれていない事実を事実として受け止め、その意義を探ることも必要であろう。②黒滝は大村の問題関心は学術の王道から「脇道に逸れ」(黒滝(2020)、p.57)る議論であるかの言うが、受け入れがたい暴言である」(同上 pp.128-129)。

下線部①について。『経済学・哲学手稿』というマルクス単独の著作を目指した草稿を自分で書いている場合には、自分で分かる略記や略式を用いてエネルギーや材料を節約することに何の不思議も無い。しかし口述となると、それでは筆記者に伝わらないことは自明であろう。この比較自体が、ここでは無意味である。

下線部②について。これに関連した議論は、本稿第V節末尾(p.39)で詳論し、「脇道に逸れる」という意味についてもそこで触れた。それは、「大村の問題関心は学術の王道から『脇道に逸れ』(黒滝(2020)、p.57)る議論である」といった主張とは何の関係も無い。これは文字通り事実の問題である。「それでは氏の仮説の提起が持つ学問的斬新性・画期性はどこにあるのだろうか? / 私見では、マルクスとエンゲルスによる『ドイツ・イデオロギー』草稿の共同作成過程を、初めて現在進行形の過程として再現したことで、これは非常に独創的・重要な業績だと考えられる」(同上拙稿 p.56)と述べていることとの繋がりを見落とさないでほしいものである。氏が何故「受け入れがたい暴言」と受け止めるのか? 私には理解できない。

次に注(8)。これについては、同上拙稿の当該箇所を再度掲げる必要がある。「M52の事例: Es versteht sich daß die große Industrie nicht in allen Ländern & nicht in jedem in jeder Lokalitäten Lokalität eines Landes zu derselben Spit Höhe der Ausbildung kommt, aber kommt... 大村氏はただ“in jeder Lokalitäten Lokalität eines Landes”のみ掲げている(編著 p.102)ので、単純な語尾の「聞き漏らし」の印象を与えるが、調べてみるとこの箇所では上記のように大変複雑な修訂正が行われていたことが分かる。/ 渋谷氏によると「in allen Ländern & nicht が1本の横線で抹消されており、また allen の上の行間に jedem が書き込まれ、これも抹消されている。行間に jedem が書き込まれているが、Ländern が単数形3格の Lande に改められ

ている形跡はない。したがって、最初に in allen と書きかけて、allen を抹消するつもりで jedem を書いたが、jedem を抹消して allen をふたたび生かし、そのあとに Ländern & nicht を書いたのであろう。『「地方 (Lokalität)」の直後に、太い抹消線がひかれて何かが抹消されている。アドラツキー版は、Lokalität <en> (<諸>地方) と判読する。』(渋谷② p.134) MEGA には写真版の収録はないが、『聞き漏らし』といった問題ではなかろう。(前掲拙稿 p.50)。

これに対する大村氏の批判：「M52 の変更については、黒滝は、当該箇所の改稿が複雑なことを解明した渋谷 (1998) を縷々紹介して、この改稿の複雑さから直ちに大村 (2018b) の推定を否認している。/ ①改稿の複雑さがなぜ大村推定の否定に繋がるのかは全く理解できない。しかしその前に、②そもそもドイツ語では in jeder Lokalitäten とは絶対に書かない。Lokalität の複数形である Lokalitäten を使うなら in jeden Lokalitäten である。口述の『聞き漏らし、ないしは聞き違い』以外にはこうした誤りは生じようがない。黒滝の理解とは逆に、ここではマルクスが複雑な改稿を指示したので、ドイツ人には本来あり得ない『聞き漏らし、ないしは聞き違い』が生じたと見るべきであろう。」(本誌 No.30, p.129)

氏はこの批判の直前に、草稿当該箇所の精細画像をここでも掲げてくれている。これが私には大変な難かった。ここの複雑な修正訂正は、MEGA の記述だけでは良く分からず、渋谷氏の詳細な説明を頼りに上掲の原文のように再現してみたのであるが、このページの写真版は MEGA に収録されていなかったのも、草稿原文との照合ができないままであった。氏の批判、下線部①については、私は in allen Ländern & Lokalitäten という繋がりではないかと推定していたのである。今回精細画像を見て新たに疑問が出てきたのは、何故 allen の上に jedem を書き込んだのだろうか？ ということである。渋谷氏の推定と少し異なってくるが、in allen Ländern を in jedem Lande と修正しようとしたのではないか。それを再修正して in Lokalitäten eines Landes、さらに in jeder Lokalität eines Landes に変更したというような議論の経過を考えられないだろうか？

下線部②については、氏の単純な文法上の誤りで、jeder は複数形では用いられない。従って単数形の in jeder Lokalität のみである。

最後に注(9)。これは、大村氏が「草稿の口述筆記をうかがわせる直接的な証拠」と見る同音異義語の混同として挙げた①～④のうち、③ beiden ⇒ bei den (代名詞の前置詞 + 冠詞への置換訂正) と④ deß[halb] ⇒ des (副詞の冠詞への置換訂正)、この二つに私が言及していないことに関して、「黒滝が両者を単純な筆記ミスの訂正と考えていて、これを理由にすると、独自の・積極的な訂正理由を思いつかないからであろうか」と推測している問題である (本誌 No.30, p.117, p.130)。

これはごく単純なことで、本稿第 I 節で触れた 2019 年 8 月 23 日の東北大学大学院情報科学研究科での国際シンポジウムにおける大村報告レジメ本文が「同音異義語の書き損じ」の例として、既に拙稿で詳論した① das と daß の混同、② führ[te] と für の混同に絞っていた (同レジメ、p.4) からである。大村氏自身が主要論点を凝縮・要約する際に省く論点 (③、④) に、私が逐一付き合う必要は無かろうという判断である。

VIII しめくくり

以上、大村 泉論文「黒滝正昭による『ドイツ・イデオロギー』草稿のマルクス口述・エンゲルス筆記説批判への反論」の諸論点ほほすべてに対して、真正面から回答してきたつもりである。他方、私が前拙稿（2020）で、これまでの研究史を踏まえる上で重要なこととして大村氏に提起した問題：「とりわけリャザーノフ（1926）については、氏の説とのかかわりが深いものなので、ヨリ精確に・深く対論すべきであったろう」（本誌 No.29, p.56）という問題提起については、今回の氏の論文の中では何の言及も無かった。残念なことである。

大村氏は「むすび」で、2018 年秋、中国・武漢大学で開催されたマルクス生誕 200 年記念国際学術研究集会において、氏が主報告者の一人として『ドイツ・イデオロギー』のマルクス口述・エンゲルス筆記説を報告、当初それを批判した英国人研究者 Terrell Carver も討論の末、大村説の可能性を認めたということ、その時の報告テキストのフルバージョンが武漢大学報に翻訳掲載され、それがさらに中国人民大学の『マルクス = レーニン主義研究』（2019 年第 5 号）に全文転載、さらに日本語版（2017）、英語版（2017, 2018）、韓国語版（2018）が出た。このうち英語版（2018）は、掲載雑誌そのものが書籍化され出版（2020）。この書籍版に MEGA² I/5 編集者がコメントを寄せてくれることを、その中身とともに氏は期待している、ということである（本誌 No.30, p.127）。

研究者にとって、この様に自分の報告・論文・著書が内外の学界・出版界で評価されることは名誉でもあり、喜ばしいことであるのは当然で、大変結構なことである。反面、私のような批判は、そういう内外の評価も弁えない、不愉快で「受け入れがたい暴言」と氏には聞こえるのかも知れない。「黒滝批判の核心部分に学術的信頼性が欠如していることが明らかになれば、それだけで本稿の課題は果たすことができるだろう」（同上 p.115）と言う訳である。

しかしながら私自身は、自分の学問的良心に従って、どのような権威の後ろ盾があろうと批判すべきものは批判する生き方を貫くのみである。本稿および前拙稿（2020）の「核心部分に学術的信頼性が欠如している」かどうか？ その判断は読者に委ねる他ない。

On manuscript of “the German Ideology”: The real questions to be answered and response to Izumi OMURA’s refutation.

KUROTAKI Masaaki

In my response to OMURA’s refutation, I set up my hypothesis to make clear the fundamental difference from OMURA’s hypothesis concerning the author-problem of “the German Ideology” manuscript. The fundamental issue is, whether or not Engels made errors in writing the manuscript. I do not consider Engels’s numerous corrections in the manuscript consequences of minor mistakes, but rather sentence changes that Marx and Engels often made due to their mutual discussions.